研究・調査報告書

報告書番号	担当
4 4	滋賀医科大学福祉保健医学講座

題名（原題／訳）

Taking up regular drinking in middle age: effect on major coronary heart disease events and mortality

中年世代の習慣飲酒：主要冠動脈疾患発症および死亡率への効果

執筆者

S G Wannamethee, A G Shaper

掲載誌（番号又は発行年月日）

Heart 2002; 87 (1): 32-36

キーワード

習慣飲酒、機会飲酒、循環器疾患、冠動脈疾患、中年期

要　旨

目的：非飲酒者と飲酒者における中年後期以降からの習慣飲酒が主要な冠動脈性心疾患（CHD）発症および総死亡率に及ぼす影響について調べること。

方法：1978-80 年に英国内 24 町において、一般診療録に登録された 40-59 歳の男性 7735 名を抽出し、全員を前向きに追跡した。ベースラインでは喫煙・飲酒・病歴を含む標準質問票（Q1）調査を行った。CHD 既往や既治療群も除外せず対象とした。5 年後に生存者全員に対して質問票（Q５）を郵送し、7275 名（生存者の 98%）から病歴、喫煙と飲酒習慣の変化、その他の危険因子についての詳細な情報を得た。

結果：Q5 の回収以降、16.8 年の追跡期間の間に、CHD 既往の無い 6503 名のうち 874 名に CHD 発症がみられ、1613 名の総死亡が観察された。ベースラインにおいて機会飲酒者であった者に比べて、常習飲酒者では、CHD 発症・CHD による死亡・全心血管性疾患（CVD）による死亡のリスクは有意に低かったが、非心血管性疾患による死亡リスクはやや増加した。新規に常習飲酒者になった者では機会飲酒者に比べて、他の予防因子による調整を行っても、主要な CHD 発症のリスクは低下した（相対危険度（RR）＝0.70, 95%信頼区間（CI）0.48-1.03；p＝0.07)。新規に機会飲酒者となった者では、CHD 発症や CVD 死亡の減少は見られず、また、非 CVD 死亡のリスクの増加が認められた（RR＝1.40, 95%CI 0.99-1.97；p＝0.06)。654 名の CHD 既往者のうちで、新規に機会飲酒者となった者では、以前からの機会飲酒者と比較しても、死亡に関してリスク減少などの効果は認められなかった。

結論：中年における新規の常習飲酒者は、機会飲酒者や非飲酒者に比べて、主要 CHD 発症のリスクの低下が見られたが、非 CVD による死亡と全死亡に関してはリスクの増加が認められた。これらの結果は、CHD の有無に限らず中年期以降の非常習飲酒者に新たな飲酒の常用を勧めることはできない。